

統合科学科目群

大学に入学するまでは、現在のところ最も確からしいとされる答を効率よく記憶することに終始したが、大学を終えれば、実社会において未だ答が知られていない、あるいは答があるのかどうかさえ分からない課題に取り組み、置かれた状況の中で最善の答を模索することになる。さらには、置かれた困難な状況を克服するために解決すべき課題を具体的に設定することも求められる。そのため、大学においては、所属するそれぞれの学部、学科が対象とする領域に固有な専門的知識の習得と論理的思考方法の獲得を目指すのはもちろんであるが、領域の壁を越えて対象を多面的な視点から考察する能力を培う必要がある。現代社会が抱える問題の多くは、自然や人類の営みの物質的側面に起因する構成員間の利害対立から生じている。理系の立場からは、人間をとりまく自然の成立ちを理解し、その理解に基づく技術によって物質的豊かさを追求するのに対し、文系の立場からは、まさにその豊かさがもたらす利害関係の構造を明らかにし、利害を調整あるいは解消する仕組みを模索する。特に、環境や生命をはじめ、現代社会が直面する重要な課題に取り組むには、文系、理系それぞれの領域に閉塞した思考様式の殻を破り、それぞれに欠けている視座の相互補完が望まれる。

本学大学院には文理にまたがる学際領域を対象とするいくつかの研究科があり、広い基礎知識の上に専門的研究を展開しているが、文系、理系のいずれかに特化した領域を対象とする場合でも、異分野の批判的視点からそれぞれの研究を見詰め直す能力を養っておくことが必要である。そのような能力の涵養を目指すのが統合科学科目群であり、統合科学分野、環境分野、森里海連環学分野など、異なる視点から授業を提供する。中でも「統合科学」は、(1) 現代社会が直面し、今後その解決策を探求する必要がある諸課題を対象とした対話を基本とする発見的授業、(2) 思い込みや決めつけ、あるいは置かれた社会や時代の空気に囚われない、客観的データに基づいた合理的思考法を獲得する授業、(3) 様々な学問分野を横断する課題に取り組み、自らが専攻しようとする学問分野の専門的知識・能力を高めるだけでなく、他の学問分野の専門家とも対話することで全体的な解決を模索する授業を目指している。具体的には、人類社会の持続的発展と深く関わる「生命と社会（生命科学の進歩と人の生活）」、「生命と社会（自然と人の関わり）」、「持続可能な地球社会をめざして（エネルギー消費と環境）」、「閉じた地球で生きる（エネルギー消費と環境）」、「総合自然災害科学」、「地球環境と人類とのバランス」、「エネルギーを取り巻く環境」の七つの主題のいずれか一つを選択し、文系、理系双方の教員を交えた対話型授業を通して、共時的にも通時的にも多面的な視点からの対象の考察法を習得する。